日本教科教育学会誌
2008. 3　第30巻　第4号

高等学校家庭科における学習者の家事労働に関する認識の変容

—「自分と家族との関わり」を意識づける授業をとおして—

福　岡　教　育　大　学　貴　志　倫　子
広島大学大学院教育学研究科　鈴　木　明　子
広島大学附属福山中・高等学校　高　橋　美与子

本研究では，家事労働の理論の検討をもとに授業実践を行い，生徒の家事労働の認識構造をとらえ，授業のねらいがどのように達成されたか検討することを目的とした。授業後のワークシートの記述内容を分析した結果，次のことが明らかになった。①家事労働の認識として価値的認識がもっとも多く発現し，家事のケアの側面に気づかせる本時のねらいはほぼ達成された。②家事労働に関する認識は，感覚的認識から功利的認識，価値的認識，社会的認識へと変容がみられた。③授業の意見交換と資料の読みとりによって，自分の生活を振り返る記述や，家事労働に関わる家族に目を向ける記述が表出し，自分と家族の関わりから生活のあり方をとらえる認識の萌芽がみられた。

キーワード：高等学校家庭科，家事労働，認識，家族と自分の関わり

Ⅰ．研究の背景と目的

日本人の家事労働への関わりの特徴として，男女間の格差，子どもの家事離れ，そして社会化された家事の選択機会の増加があげられる。性役割や男女の生活時間の偏りの是正，子どもの生活経験としての家事労働参加，適正な家事労働の社会化は，現代の生活課題となっている。

1989年告示の学習指導要領における普通教育に関する科目「家庭一般」等では，生活時間の配分と関わらせた労力の管理や能率化に加え，職業労働との関連で家事労働をとらえる視点が示された[1)]。家事を労働ととらえる視点は1999年告示の学習指導要領にも受け継がれ，職業労働と家事労働それぞれの意義や特徴をふまえ，固定的な性別役割分業を見直し，人間らしい働き方をするための課題について考える家庭科のあり方が示された[2)]。家事労働は，社会的課題として家庭科教育において扱うべき重要なテーマである。ジェンダーの視点で家庭から社会へとつながる家庭科学習の「総合化」をはかるために，家事労働を中心としたカリキュラムの枠組みが提示されている[3)]。

家事労働に関する授業として，高等学校家庭科では，生活時間調査による実態把握から家事分担のあり方を考えさせる実践[4)]やランキングの手法を用いた実践[5)]，ロールプレイやチェックシートを用いた教材[6)]等が報告されている。けれどもこれらの授業実践によって，子どもが家事労働に対してどのように自己の認識をもつようになるのかという変容過程や認識構造の追求に焦点をあてた研究は，あまり行われてきていない[注1)]。家庭科において家事労働のように価値判断を伴う題材の授業方略をより明確にするためにも，生徒の認識構造を把握することが必要である。

筆者らは2005年，高等学校「家庭基礎」において，①生徒が自分の家族との関わりや家事への参加の実態をふまえて相互に意見交換する場と，②限られた時間の中で家事労働に関する多様な価値にふれる機会を設け，家事労働に関する認識の変容を促す授業の提案を行った[7)]。生徒のワークシートの記述を分析した結果，授業によって認識変容を促すことができた。認識の内容として，「家事労働概念の深化」，「家事分担意識」，「バランス感覚」などの観点を得，家事労働に関し，生活実践における意思決定に至る認識や価値形成の一端を明らかにすることができた。しかしながら，見いだされた観点は，家事の実践，関わりの度合いという点でひとつの観点のなかに多様な認識レベルが未分類のまま残されている。このため家事労

働の認識の拡張や深化を構造的にとらえるまでには至っていない。授業構想の段階から認識の変容構造を視野に入れた設計が必要である。

そこで筆者らは，家事労働の理論検討をもとに先行研究の授業改善を試み，実践を行った。本研究では第一に，授業において表出された生徒の家事労働の認識の変容を構造的にとらえること，それによって第二に，授業のねらいがどのように達成されたか検討することを目的とした。

Ⅱ．研究の方法と分析の枠組み

1．家事労働の理論と家庭科学習の課題

家事労働は，家庭の機能遂行にあたって，食衣住に関する作業面のみでなく，家庭運営および人間形成に関わる精神労働をも含む人間の生命に関する労働であり，そこに本質的価値をもつ[8]。スーザン・ヒメルワイトはこのような見方を，家事労働論の現段階として「労働からケアへ」と特徴づけ，家事から労働概念とケア概念を分離し，家事には他者に代替できない，人をケアする側面があることを指摘した[9]。そして家事を労働とケアの両面からとらえることを提唱している。

家事労働と職業労働のあり方として，ナンシー・フレイザーは，女性が男性並みに働くかわりに家庭内の家事労働は外部化する「両性稼得者モデル（universal bread winner model)」，主として女性が担うことを余儀なくされた介護や育児などのケア役割の評価を行い，ケア役割を担うことで損失を被らないよう補填する「ケア提供者対等モデル（caregiver parity model)」の二つの方向をあげる[10]。フレイザーは，しかし，どちらのモデルにも限界があり，最終的には，男女がともに職業労働も家庭責任も担う「普遍的（両性）ケア提供者モデル（universal caregiver model)」を目指すべきと主張している。

このモデルは，二つの視点から実現不可能であると批判されてもいる[11]。第一に，一夫一婦制カップルを前提としており，ひとり親や独身者が増加する社会においては基盤を失う理論であるとの指摘である。第二に，経済格差が世帯間や国家間にあるかぎり家事の外部化傾向は止まらず，現在，機会費用の高い働く男性や女性が，性役割解決のために自己の費用効果を無視して，不払い労働である家事を積極的に担うことは考えにくいという指摘である。男女平等のみの視点から両性で家事労働を担うというモデルの提示は，ケアを負担ととらえる見方を助長しかねない。

そこで現実的には，1）無償労働，ケア労働の社会的評価を高めながら，2）女性の市場労働での活躍を保障する非営利の無償労働代替サービス（介護や育児サービス）を提供し，同時にそこに新たな就労の機会を創出しつつ，3）労働市場の制度を生活世界の論理に沿って改革して，4）普遍的（両性）ケア提供者モデルを実現していく，という展開が期待される[12]。家庭科教育では，この展開におけるケアの社会的価値形成を促すことによって，両性ケア提供者モデルを可能とする社会のあり方を問うていくことができると考える。

現行の高等学校家庭科の教科書では，職業労働との比較や家事分担，家事の社会化の記述が共通してみられる。上記2），3），4）の女性の働き方と家事の社会化の問題，ジェンダー平等の視点は教科書レベルに反映されているといえる。けれども，1）の社会的評価に関しては，いくつかの教科書で経済的評価である家事労働の貨幣評価が取りあげられているものの，家事をケアの側面から評価するような記述，すなわち，家事をすることによる関係性や得られるものに関する記述内容の偏りがみられる[13]。

普遍的（両性）ケア提供者モデルのあり方の追求は，男女共同参画社会の実現に向けた家庭科学習に欠かせない視点である。ただし，家事の見方が，負担を分担するという労働の側面にのみ向けば，少ない家事経験しかもたない多くの子どもにとって家事労働は関心を向ける対象とはなりにくいだろう。家事労働の社会的評価を高めるための教材開発と教科指導の工夫が必要である。

2．授業改善の視点

そこで2005年に実施した授業の一部を改善する視点として，ケアの社会的評価を高めることに焦点をあて，家事を労働とケアの両方からとらえる構成となるよう試みた。

本時授業のねらいは，次の３つにある。

①職業労働と家事労働の比較および，家事労働の意識より家事の労働としての側面とケアとしての

側面に気づくこと。
②家事労働の社会化が進む背景と，社会化によって引き起こされる問題を理解すること。
③家事労働に関わる子ども，親，男女の視点を資料の読みとりと班員との意見交換からとらえ，家事分担の意義を自分の現在と将来の生活に照らして考えること。

昨年度実践からの改善点として，家事労働の理論検討をふまえて，とくにねらい①をあげ，指導の観点として，家事を人と人をつなぐケアであるととらえる視点を明確にした。ねらい③では，新たに家事に関わる子どもの視点をとらえる活動より，家事労働の社会的評価を問い，家事労働に対する考え方が将来の豊かさに通じることに気づき，今の生活の課題として家事労働への認識を深め，家族との関わりを考えることを期待した。

家事労働の授業は，表１に示すように，「家庭基礎」の授業として，単元「人の一生と家族」全25時間のなかに位置づけられた。「１．家族と自分の関わり」では，家族とは何かをビデオ視聴[注2)]とランキングによって考えた後，生活時間から自分と家族の生活をとらえ，本時の家事労働の学習へとつなげた。その後，家事労働の一つとしての調理に焦点をあて，食生活における自分と家族との関わりについて，実習を交えた授業展開のなかでとらえさせた。

表１　「人の一生と家族」の授業展開（全25時間）

単元計画	
１．家族と自分との関わり	21時間
家族・家庭とは	（４時間）
一日の過ごし方（生活時間）	（２時間）
家事労働について考える	（２時間）……本時
食生活において	
現代の食生活について	（３時間）
実習を通して	（６時間）
調理実習	（４時間）
２．ライフコースと生活課題	３時間
ライフサイクルとライフステージ	（１時間）
いろいろなライフコース	（１時間）
ライフコースと生活課題	（１時間）
ライフステージごとの発達課題	
３．私の人生を築く	
青年期の生き方を考える	１時間
進路選択をするにあたって	

＊ただし，２．３．については一年間の最後に実施する

３．本時授業の概要

本時「家事労働について考える」の２時間分の授業過程は，表２のとおりである。導入から展開②の「５．家事労働についての意識」で，資料１から現代の課題をとらえ，家事分担の解決策を話し合うまでは，前年度の授業と同様である。その後，新たに加えた家事による脳の活性化を記した新聞記事（資料２）をふまえ，子どもが家事をすることについてグループでの意見交換を行う。家事をすることによって得られることや，家事をとおした家族の関わりについて，他者と課題を共有しながら考える場面を設定した。グループ討議からケアとしての家事に関わることの意義に気づかせることを目ざした。そして，家事労働に関わる男性の手記（資料３）より，家事に関わることの家族内での相互理解の必要性と労働問題としての社会的視野に立った取り組みの必要性を考える。これによって，男女の格差是正に加え，「普遍的（両性）ケア提供者モデル」実現に向けた課題を整理させる構成とした。

４．分析対象

本時の授業は，2006年５月に国立大学附属Ｆ高等学校一年生普通科３クラス計128名（うち男子74名，女子54名）を対象に行われた。Ｆ高等学校は，中高一貫教育を行っており，１学年は普通科５クラスである。生徒の90％以上が大学へ進学しており，文章読解の学力は総じて高い傾向にある。

本時の実施にあたり，生徒の現状を把握し授業改善に生かすために，「一日の過ごし方」の授業開始時に生活時間および家事労働への関心を把握する授業前調査を行った。内容は，「自分」と「家族」の「時間の使い方に対する関心」，「家族での家事分担の話し合い経験」，「家事を分担するようにいわれた経験」，「家事することへの興味」，「家事ができるようになりたい意欲」の６項目についてで，「とてもある」から「全くない」の４件法によって尋ねた。

本研究で主として分析するのは本時に使用した家事労働に関するワークシートの記述である。具体的な分析項目は，本時授業のまとめとして記入した「家事労働を家族みんなで分担することについてどのように考えが変わりましたか」に対する記述である。記述は，基本的に一文で区切りカード化した。一文に異なる概念や考えが含まれるときは，意味のまとまりによって区切った。

表２　本時「家事労働について考える」（２時間）の授業過程

過程	学習内容	生　徒　の　活　動	分
導入	１．家事労働の種類 ２．家事労働についての課題	(1) 日常生活の中で自分や家族がこなしている家事にはどんなことがあるのかを発表する。 (2) 家事労働に関して色々な問題があることに気づき，自分は現在および将来どのように関わっていくとよいのか，課題意識をもつ。	10 15
展開①	３．家事労働の特徴 ４．家事労働の軽減の方法とその弊害	(3) 職業労働と比較しながら家事労働にはどのような特徴があるのかを考える。 (4) 家事労働を軽減するにはどのような方法があるのかを理解する。 (5) 企業や公共機関が提供するものの利用や地域の人たちとの協力では家族の生活に色々な無理が生じてくることに気づく。	15 5 5
展開②	５．家事労働についての意識 ６．子どもが家事を分担することの意義 ７．夫婦で家事を分担することの意義	(6) 共働きで妻一人に家事が集中している家庭の現実の様子を示している文章（資料１）を読んで以下のことについてグループ（３～４人）で話し合う。 (7) 家事労働について現状はどうか，どんな考えをもっているのかグループごとに話し合う。 ・高校生が家事労働を分担することについて ・高校生が家事労働をしたことで小遣いをもらうことについて (8) 親子で調理することが，子どもの様々な能力開発にとって有効性があるという内容の新聞記事（資料２）を読んで，家事をこなすことで子どもは心身ともに成長していくことを理解する。 (9) 主夫体験をした男性の家事に対する意見が書いてある文章（資料３）を読んで，夫婦で分担してこなすことでお互いの大変さがわかり，お互いにいたわりや感謝の気持ちが生まれてくることを理解する。	15 15 5 5
まとめ	８．家事労働についての意識の変化	(10) 家事労働に現在や将来どのように関わっていきたいのかを考え授業を通して家事労働に対する意識がどのように変化したかをまとめグループの中で意見交換をする。（個人の意見をワークシートに記入）	20

資料１「こんな日常どう思いますか。このレールから外れるわけにいかない…？」
広島市西部のマンションに住む内山良美（46）－仮名－は，会社員の夫（46），高校１年生の長男と３人暮らしで，共働き。11月のある日，「会議の資料作りが…ある」夫は，午前７時に栄養ドリンクを飲んで，出勤。寝るのが遅かった長男は布団でぐずぐず。今日も朝食を食べずに登校した。良美はトーストと牛乳で済ませ，職場へ。…略…
（出典：西日本新聞社食・くらし取材班『食卓の向こう側１』，2004より抜粋，登場人物の年齢等を変更）

資料２「脳と調理　家族で料理大切さ訴え」
普段から親子で料理することが，脳にどんな効果を与えるか調べる実験を，東北大学未来科学技術共同研究センターの川島隆太教授（脳科学）と大阪ガスが，来月から始める。親子の脳を活性化させるとともに，子どもの心身の健全な育成につながることを実証し，家庭で料理することの大切さを訴えるのが狙いだ。…略…
（出典：読売新聞朝刊“くらしと家庭－脳と調理－”，2006年４月８日）

資料３「男と家事－ぼくの体験から…」
通算すると１年になる“主夫”体験と，何年にもおよぶ共働き体験から，ぼくははっきりと断言できる。「この世に家事ほどメンドーなものはない」と。日々，連綿と続く瑣末な労働。やっつけてもやっつけても，次から次へとわいてくる。…略…
（出典：山下了一「男と家事－ぼくの体験から」成澤壽一編『これからの男の自立』日本評論社，1998より）

授業前調査からの変化をとらえるために，最終的な分析対象としたのは，授業前調査およびワークシートの両方がそろっている119名（男子67名，女子52名）である。

５．家事に関する認識の分析枠組み

授業前調査からワークシートの記述分析に至る枠組みを図１に示す。

家事労働の認識は，感覚的認識，功利的認識，価値的認識，社会的認識の４つのレベルでとらえた。この４つは，社会科教育の評価方略として認識レベルの分類に使用されているものである[14]。社会科では，公民的資質を養うことを目的に，社会的認識の涵養が目指される。他方，家庭科教育の視点は，個人や家庭生活を起点とし，生活価値を涵養することにある。生活価値は，社会のあり方と深く結びつくものであり，認識構造をとらえる点において，社会科と家庭科のアプローチは共通点をもつ。ゆえに本研究で家事労働の認識を把握するのに有効であると判断し，援用した。４つの認識は，感覚的認識から社会的認識へと高まっていく構造をもつものとされる。家事労働の認識においても自己の感覚から家族や社会など他者を意識した社会的な認識へ広がる構造が見いだせると考えた。

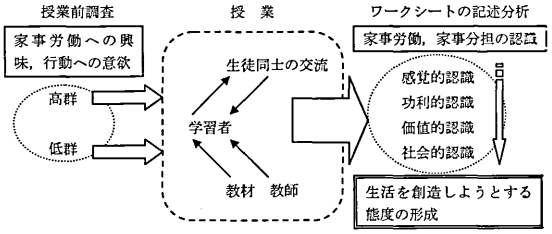

図１　分析の枠組み

Ⅲ．結果および考察

１．授業前調査の結果にみる生徒の関心と意欲

表３に授業前調査の結果を男女別に示す。時間の使い方に対する興味では，自分自身の時間の使い方に興味が「とてもある」，「少しある」を合わせると男子で65.7%，女子で78.9%であった。対して，家族の時間の使い方への興味は男子では46.3%が「ほとんどない」，28.4%が「全くない」とし，女子も「ほとんどない」，「全くない」をあわせて53.8%が家族の生活時間には関心を寄せて

いなかった。

つぎに家事労働について，家族で家事分担について話し合った経験が「よくある」または「たまにある」生徒は，男子で29.9%，女子では46.1%であった。実際に家事分担をするようにいわれた経験が，「よくある」，「たまにある」男子は65.7%，女子は75.0%であった。

この二つの項目について「よくある」「たまにある」を「経験あり」，「ほとんどない」「全くない」を「経験なし」として，その組み合わせのパタンを分析した（表４）。家事分担について家族内で話し合ったことがあり，分担するようにもいわれたことがある生徒は男女あわせて33.9%であった。いわば日常生活に家族や自分の課題として家事をとらえる機会のある群ととらえられる。逆に家族との関わりで家事分担が話題にならず，自らも家事分担をするようにいわれたことのないのは26.3%であり，家事労働への関心や家族の時間の使い方への関心なども軒並み低い傾向にあった(以下この層を，授業レディネス低群と称する)。家事に関わっているために分担を言われない場合と，まったく関わりがなく，家事の担い手として周囲から期待されていない場合が考えられるが，実情として後者が多いことが推察される。

家事への興味は，女子では78.8%が「とてもある」，「少しある」としているのに対し，男子は52.3%にとどまり，性差がみられた。しかし家事ができるようになりたいという意欲は，男女ともに高い。

以上から，授業への構えについて，男子は女子に比べて家族や家事への関心が高いとはいえない。けれども，自分の時間の過ごし方や自活のための家事には女子同様に，関心を示しているものが多い。このことから，授業では，まず生活時間や家事労働について自己の生活との関わりでとらえることが重要であるといえる。その上で，とくに男子生徒の認識の変容には，家事を他者との関わりにおいてとらえることを促す方略が必要であることが示唆された。

表３　自分と家族の時間と家事に関する意識（授業前調査）（%）

	男子(N=67)	女子(N=52)
自分の時間の使い方に興味が		
とてもある	25.4	13.5
少しある	40.3	65.4
ほとんどない	20.9	17.3
全くない	11.9	3.8
N.A.	1.5	0.0
家族の時間の使い方に興味が		
とてもある	3.0	7.7
少しある	20.9	38.5
ほとんどない	46.3	36.5
全くない	28.4	17.3
N.A.	1.5	0.0
家族で家事分担について話し合ったこと		
よくある	3.0	9.6
たまにある	26.9	36.5
ほとんどない	50.7	36.5
全くない	19.4	17.3
家族に家事を分担するよういわれたこと		
よくある	17.9	30.8
たまにある	47.8	44.2
ほとんどない	23.9	19.2
全くない	10.4	3.8
N.A.	0.0	1.9
家事をすることに興味が		
とてもある	7.5	19.2
少しある	44.8	59.6
ほとんどない	34.3	15.4
全くない	13.4	5.8
家事ができるように		
とてもなりたい	38.8	67.3
少しなりたい	52.2	32.7
あまりなりたくない	4.5	0.0
全くなりたくない	4.5	0.0

表４　家事分担の話し合いと家事分担をいわれた経験のパタン（男女）

		家事分担をするよういわれたこと		
		経験あり	経験なし	計
家族での家事分担について話し合ったこと	経験あり	33.9	3.4	37.3
	経験なし	36.4	26.3	62.7
	計	70.3	29.7	100.0

注）経験「あり」は，「よくある」「たまにある」，経験「なし」は「ほとんどない」「全くない」の回答をあわせたもの

２．生徒の家事分担に関する認識の発現と類型化

１．の結果をふまえ，本時授業を実施した。授業後，生徒のワークシートの記述をカード化したところ327枚となり，一人あたりの平均は2.64枚であった。男子の平均は2.37枚，女子2.98枚と女子の記述数がやや多い傾向にあった。

類型化した項目と記述例を表５に示す。認識項目は27となった。感覚的認識９項目，功利的認識３項目，価値的認識11項目，社会的認識３項目である。記述数では，価値的認識に分類されたのが全体の39.4%（129枚）を占めた。ついで，功利的認識と感覚的認識がそれぞれ，23.5%（77枚），22.3%（73枚），社会的認識は全体の11.6%（38枚）であった。

(1) 感覚的認識

具体的ではないものの，家事労働や家事担当者の状況をイメージしてとらえている記述を感覚的認識とした。家事分担について「いいと思う」という理由づけのない記述や，「母だけに家事をさせるのはかわいそう」，「母親もたいへんなんだな～」など家事労働を感覚や心情的にとらえているもの，「大人になったら，参考にしたい」など家事への条件つきの関わりや消極的な関わり，家事の性質についての記述が抽出された。記述数では「家事分担はいいこと」のように肯定的記述が17件，家事労働は「負担，大変，面倒」だと否定的側面をとらえる記述が25件であった。

授業レディネス低群において，「やったほうがいい」，「今の家があるのは母のおかげだ」など肯定的，共感的認識が記述されていた。それまで全く意識されていなかった家事労働について認識が発現している点で評価できる。

(2) 功利的認識

功利的認識は，家事分担をすることによる家事担当者の具体的な利益を認識している記述である。記述内容の多くは，本時の授業で教師より提示された資料１，２にもとづく利点をまとめたもので，これまで認識しなかった家事労働への新たな見方が広がったことが伺えた。「家事をすることで脳にも良い刺激となることが分かった」など個人的能力の開発や自立に向けた利点について記述したものと，「家事分担は負担を減らすため」など負担軽減や効率の面から利点を述べたものに分類された。

(3) 価値的認識

価値的認識とは，家事分担の実利よりも，家族の関係性や分担行為そのものの意義を肯定的にとらえる認識である。もっとも多かったのは「分担することは大事だと思った」という家事分担の意義や大切さに言及したもので39件あった。本時授業で教師や提示された資料から考えたこととして，「家事を分担することで家族のまとまりができる」，「分担してこそ家族」など家族の関係や絆を深めるものとして家事分担に言及しているものがみられた。ほかに「思いやり」，「協力，助け合い」，「他者理解・相互理解」，「交流，コミュニケーション」など他者の存在との関わりのなかで家事労働をとらえる記述が多くあげられた。

価値的認識は，功利的認識との組み合わせで発現するケースが多くみられた。授業資料によって功利的認識を得たことから，人との関わりに目がむけられ，価値的認識が発現していたと考えられた。

(4) 社会的認識

自分のためだけでなく他者を意識した認識で，かつ行動に結びつけようとしている認識，および，家事の現状を家族内の関わりだけでなく，職業や社会のあり方にまでひろげている認識を社会的認識とした。「これからは行動に移していく」，「少しずつだが仕事をするようになった」などの記述を「積極的関与」と分類した。「学校だったり会社だったり忙しいからできることが限られてくる」，「お互いのことを理解するのが重要だ，（略）それが難しいために問題も苦労もたえないのだ」など家事分担が困難な状況についての記述が15件あり，これを「現実社会の状況把握」とした。本時の家事分担の必要性を強調する授業の流れからみると，この状況把握は，認識段階としてはより消極的であると判断される面もある。しかしながら，家事は家族で分担することだけが唯一のあり方ではない。むしろ，このような現実的認識は，家族内で家事の負担が偏っている場合，なぜ家事分担が進まないのかという家事労働の問題を，社会的構造と結びつけ認識を深めていく際には，不可欠であると考え社会的認識とした。社会の変革の必要性について明確に記述されたものは２件のみであった。これを「社会の関与」とした。

(5) その他

上記４つの認識に分類されなかったその他の記述には，前時までの生活時間の資料をふまえ「父の仕事の大変さの方を強く感じた」ものや，自分のために家事をしてくれている親の立場に思い至り，「自分にかけられている願いを達成することを大切にしようと思った。」，「同時にしっかり勉強することも大切で，一番の孝行になるのかも知れない。」と，高校生として今の自分に求められていることを再認識した記述があった。他方，「存在意義というのはなんだかしっくりこない。」と家事分担によって家族内の評価が得られるという教師の提示した価値に違和感を示すものや，「授

表５　家事分担に関する認識の類型と生徒の記述例

上位項目	下位項目	内　　容	記　　述　　例（原文どおり）	記述数
感覚的認識	分担の肯定	理由づけなしに家事分担を肯定しているもの	いいと思う。	17
	家事してもらうこと	家事をしてもらっている状況についての気づきに言及したもの	感謝をしているつもりでも，やはり，『やってもらうのがあたりまえだ』と思っていたと思う。／飯のリアクションは大切なんだなと思った。	4
	家事する人への感謝	家事担当者への感謝，尊敬について言及したもの	やってくれたことに対して，感謝しなくてはいけないと思った。／今の家があるのは，母のおかげだと思いました。／かんしゃしたいと思います。	4
	家事する人の心情	家事担当者の心情や状況について言及したもの	母親も大変なんだな～とは前から思っていた。／一人で家事をやる人は精神的にも身体的にも辛いということがわかった。／家事労働は自分たちだけでなく，母たちもめんどくさいと思っていることがわかった。	4
	家事する人への同情	家事担当者に対する自己の心情について言及したもの	家事という仕事を＋（註：プラス）するのはかわいそう。／母だけに家事をさせるのは，かわいそうだと思った。	5
	家事の負担感	大変，面倒，負担など家事の否定的側面に言及したもの	家事労働はとても大変だと分かった。／家事を手伝うことは面倒だと思っていた／１人にかかる負担は想像していたよりも大きい。	25
	消極的関与	条件つきの関わりや消極的な関わりについて言及したもの	大人になったら，参考にしたいと思う。／めんどくさい事が増えたけど仕方がない。／まぁ，少しはした方がいいと思った。	8
	感覚の発現	これまで考えることがなかった問題への気づきに言及したもの	特に，いままで考えたこともなかったが、それなりに考えるようにはなった。	2
	家事の性質	多様である，際限がないなど家事の性質に言及したもの	家事労働は多くしようとすれば，より多くすることができるものだ。	4
功利的認識	個人への好影響	家事する人自身への好影響について言及したもの	家事（料理など）をすることで脳まで活性化できるのを知った。／自分の仕事を持つことで，責任を持つことができると思うし，自分の将来のためになると思うから。	29
	負担軽減，効率	家事分担による個人の負担軽減や効率について言及したもの	分担することで一人の負担も減りとても大切なことだと思った。／みんなで分担すれば少しでも負担がかるくなる。	34
	全般的利点	具体的でないが家事分担による全般的な好影響に言及したもの	家事の分担には多くのメリットがあるから，分担することは良いことだと思う。／分担をすることによって，いいことがたくさんあることを知った。	14
価値的認識	思いやり	家族のための思いやりを育むものとして家事への関わりに言及したもの	することにより，家族での思いやりの心が育つ。／自分から家族のためを思ってする手伝いが１番だと思った。／自分の時間を一人のために使うのではなく家族みんなのために使うことで，様々な利点があることを実感した。	8
	協力，助け合い	協力としての家事分担について言及したもの	家族の助け合いで一人の負担が減り，（略）	10
	他者理解，相互理解	家事に込められる他者の苦労や気持ちを理解するものとして家事分担に言及したもの	やってくれる人の気持ちを知ることができる。／お互いの苦労がわかったり，（略）／わかることがある，いままでわからなかったことが。	9
	きずなの深まり，よりよい関係	家族の関係や絆を深めるものとして家事分担に言及したもの	一人ひとりが分担してすることにより，それぞれの大変さを考え，もっと家族の関係が深まっていくと思う。／家事労働を分担することで，家族の中でまとまりができると思う／家事労働を分担してこそ家族なんだ，と思えるようになった。／家事労働で，家族のきずなは深まっていくと思う。	15
	交流，コミュニケーション，団らん	家族のコミュニケーションをはかるものとして家事分担に言及したもの	コミュニケーションをとるという目的のために分担していこうと思った。	10
	家事の価値づけ	家事の価値に言及したもの	家事は家族を成立させる基本的な要素だと思った。／“家事労働”はバカに出来ない。／身近な家族との時間，家族のための時間だからこそ，大切にしなければと思う様になった。	10
	責任・義務	家事分担を責任や義務（すべきこと）を果たすものとして言及したもの	家族の一人だから，家事をするのは，あたりまえなんだ。／最初は家事労働を分担することはめずらしいことことだと思っていたけど，…（略）…本当は分担してあたり前のことだったんだと気づいた。	17
	必要性	家事分担の必要性について言及したもの	家事労働の分担について具体的にわかったから，その考えが強くなった。／改めてなぜ分担が必要かが分かったと思う。	5
	分担の価値づけ	家事分担の意義，大切さに言及したもの	分担することは大事だと思った。／とても大切なことだと考えがかわった。	39
	分担者の価値づけ	家事が女性に限るものでないことに言及したもの	統計的にも，日本の男性は，家事をしない人が多いようなので，やはり少しずつでもすべきだと思った。／子供にも，家事を分担させる習慣をつけさせるべきだと思う。／家事は女性だけがするものではなく，…（略）	4
	その他	上記以外で家事・家事分担に関する価値について言及したもの	家族の一員ということを自覚する	2
社会的認識	積極的関与	積極的関わり	分担をしていたかというとしてなかったのでこれからは行動にうつしていく。／それぞれの立場になって考えて，自分のできることをする。／（略）…実行にうつさないといけないと思う。最近は，少しづつだが何か仕事をするようになった。	21
	現実社会の状況把握	現実社会の状況に照らして家事分担の難しさに言及したもの	実質学校だったり会社だったり忙しいからできることが限られてくる。／（略）…お互いのことを理解することが重要だと思う。しかし，それが難しいために問題も苦労も絶えないのだと思った。／なんだかんだいって厳しいと思う。	15
	社会的関与	社会の変革が必要	家事労働を分担するのは社会の考え方が変わらない限りできない事だと思う。	2
その他		上述の項目にあてはまらないもの	父の仕事の大変さの方を強く感じた，今まで母が大変だとばかり思っていた。／自分にかけられている願いを達成することを大切にしようと思った。／同時にしっかり勉強することも大切で，一番の孝行になるのかも知れない。／存在意義というのはなんだかしっくりこない。／授業でやったことは，自分の考えと違わなかったから，特に何も変わらなかった。	10
			計	327

業でやったことは，自分の考えと違わなかったから，特に何も変わらなかった。」と授業が生徒の認識を強化したり，揺さぶるものとはならなかったことを示す記述も少数ながらみられた。

授業レディネス低群の記述の中に，「誰かが一人で家事をするよりも負荷が軽くなるし…（略）家族の絆を深めていければよいと思った。」という価値的認識や，「子どもは勉強ができるくらいの，多少余裕のあるものをやらせたりするといい」など，子どもの置かれた社会状況をふまえた社会的認識もみられ，授業が多様な認識発現のきっかけになっていることが示唆された。

生徒の64.1%は，４つの認識領域のうち，2領域以上にわたる記述をしており，3つ以上の領域にわたって記述していた者が全体の21.0%いた。複数の視点からの記述がみられたことは，授業における意識づけが多面的に行われた成果とみることができる。

３．家事分担に関する認識の変容

さいごにワークシートの記述より，認識の変容過程をとらえることとした。ワークシートでは考えの変化を問うているが，記述の仕方として必ずしも「ＡからＢへ変化した」という書き方にはなっていなかった。よって本研究では，変容過程を明確に読み取れる記述のあった23名について，記述内容を分析した。表６は，認識の変容過程とワークシート記述を示したものである。

(1) 家事分担に関する認識の発現

23名のうち，「今まで考えたこともなかった(No.11註：表６の生徒番号を示す，以下同様)」が，授業によって家事分担の認識が発現していた者が５名（No.11, 30, 72, 33, 99）いた。No.30は，グループ活動による交流を通した友人の家事分担の発言に刺激され，これまで意識されていなかった家事の認識が感覚的に変容しつつあることが読み取れた。No.33は，「家事労働は“バカ”にできない」ものであり，分担による自分や家族への功利的側面を知ることによって，家事を「家族との時間，家族のための時間」と認識し「大切なもの」であると記述しているように，価値的認識を得たうえで，「全てを母に回さなければいけない状態」からの脱出をはかりたいと，自らの関わりを意識する記述がみられた。

(2) 感覚的認識の変容

「はじめは自分でやるのはめんどくさい」，「分担はした方がいい」など，感覚的に家事労働をとらえていたレベルから認識が深まったと考えられるのは９例であった。このうち功利的認識への変容は３例（No.8, 40, 1），価値的認識は７例（No.8, 40, 1, 91, 34, 80, 120：他の認識との重複あり），社会的認識への変容がみられたのは２例（No.120, 60）であった。全体的に，授業で示された家事分担の利点について考えることにより，具体化された家事労働のイメージをもつことができた記述が多くみられた。

(3) 功利的認識の変容

該当するのはNo.2, 15の２例で，いずれも，家事分担は家事担当者の負担軽減のためだけでなく，家事をする人自身の利点となるという新たな功利的認識が発現した。

(4) 価値的認識の変容

価値的認識から変容がみられたのは，７例(No.31, 43, 122, 39, 41, 115, 18）あり，うち６例は女子生徒であった。４例に，社会的認識がみられた。社会的認識として，「何でも積極的にやりたい(No.31)」「これからは行動に移していく（No.18)」と行動への意識づけや，「更に，家事がやりやすくなった（No.39)」と行動の意義づけを記述したものがあった。他方，「学校に来ている私ではできないこともある（No.43)」と，家事分担行動に積極的でない方向への変容とみてとれる記述もあった。しかし，価値的認識として，家事労働の重要性に言及しており，認識が後退したというより，授業で得た情報を吟味し，現実的な解決策を求めるがゆえの躊躇とみることができる。

Ⅵ．まとめ

「家事労働について考える」授業を実施し，生徒の家事労働に関する認識を構造的にとらえ，授業のねらいが達成されたかを検討することを目的とした。

第一に，家事労働に関する認識は複数の領域で発現しており，授業における情報提示が生徒の認識を多様な側面から刺激していたことが示された。

第二に，４つの認識レベルにおいて，価値的認

表６　家事労働に関する認識の変容がみられた記述の一覧

SQ No.	性別	変容の過程	「家事分担することについて」のワークシートの記述（原文どおり）
No.11	男	→感覚	特に，いままで考えたこともなかったが，それなりに考えるようにはなった。■色々，母親も大変なんだな～とは前から思っていた。
No.30	女	→感覚	今まではほとんど家事をしていなかったけど，同級生のあまりの偉さにびびって改めようと思った。
No.72	女	→功利，価値	あまり，今まで家事労働について考えたことがなかったけど，家事労働を分担することの大切さがわかったと思う。■分担することによって，親にストレスがたまらないのもあるけど，■なにより自分の脳がよくなって肌までピカピカなんていい事ばっかしだ!!■これからは家事を手伝うのも自分のため，と思ったらやりやすいかもしれない。
No.33	女	→功利，価値，社会	出来る人が出来るだけの事を，すれば大丈夫だと思っていたが，“家事労働”はバカに出来ない。■身近な家族との時間，家族のための時間だからこそ，■大切にしなければと思う様になった。■分担も，全てを母に回さなければいけない状態は脱出できるよう努力したい。
No.99	男	→価値	とても大切なことだと考えがかわった。
No.8	男	感覚→功利，価値	初めは，自分でやるのは面倒くさいと思っていたけど，■家族で協力して生活するためにも，■自立へと向かうためにも，■家事労働をしてみてその大切さを知った方が良いと思うようになった。
No.40	女	感覚→功利，価値	家事の分担は前からした方が良いと思っていたけど，■脳の活性化や，思ってもみていなかったところで良い面が見つかってビックリした。
No.1	男	感覚→功利，価値	僕は家族みんなで分担することに対してはもともと賛成意見でしたが，■これらの資料をみて大変さを改めて実感しました，■１人でやるというのは多大な負担ですが，■何人かでやれば随分楽になるうえ，■手伝った人も脳が活性化されるというのならば，これほどよいシステムはないと思います。■決められた仕事をこなすだけでなく，積極的に協力していくべきだと思いました。
No.91	男	感覚→価値	まあ，いいんじゃないぐらいに思っていたが，■家事労働を家族みんなで分担することで思いやることができるようになり，家族みんなが幸せになれることがわかった。
No.34	女	感覚→価値	家事を手伝うことは面倒だと思っていたが，■資料２，３を読んで，家事労働を分担することはとても大切なことだと気づいた。■家族の一員として思いやりをもって，■積極的に家事を手伝うべきだ。
No.80	女	感覚→価値	最初は家事労働を分担することはめずらしいことだと思っていたけど，■その大変さや大事さを知って■本当は分担してあたり前のことだったんだと気づいた。
No.120	女	感覚→価値，社会	今までは，少々渋っていたけれど，いろんな文などを読んで，母親に傾きがちな家事労働について理解できた。■積極的に手伝いをしていきたいと思う。
No.60	男	感覚→社会，その他	父の仕事の大変さの方を強く感じた。■今まで母が大変だとばかり思っていた。■時間の余裕の差を知った。■家族の協力というものは大切だが，自分にかけられている願いを達成することを大切にしようと思った。■勿論，将来を見据えれば，家事経験は大事で，手伝う気になった。
No.123	女	感覚→その他	最初はただ「分担すれば良い」とだけとしか思ってなかったけど，今は「ただ分担するだけではだめ」と思ってきた。■分担しているとできない日もあるだろうし，毎日同じことを繰り返しも大変だと思う。■だから，気付いた人からすればいいと思う。
No.2	男	功利→功利	家事をやっている人が単に楽になるのかと思っていたが，■他の人，周りの家事に参画した人にもよい影響があるんだなと思った。
No.15	男	功利→功利，価値	家事を分担することによって，初めは，親の負担が減るだけだと思っていたけど，■実際はそれもあるけど，それ以上に，自分が達成感や，■することの大切さなどが分かるんだと，分かった。
No.31	女	価値→感覚，社会	分担するのがあたりまえ!!前と変わらない。■母さんも仕事をしているのだから，家事という仕事を＋するのはかわいそう。■疲れがよけいとたまってしまう。■何でも積極的にやりたいと思う。
No.43	女	価値→感覚，社会	重要なことだとわかっていたけど，■やはりやるべきことだと思う。■でもその反面，何十種類もある家事を分担するのは大変なことだと思うし，■学校に来ている私ではできないこともあると思った。
No.122	女	価値→功利，価値	「しなければならない」とか「したほうが良い」などということは知っていたが，それが何故なのかということは考えたことがなかった。■しかし，いろんなことを学んだことで，家事を分担することは，自分のためでもあることが分かり，■分担することは大事だと思った。
No.39	女	価値→功利，社会	当たり前だとただ単に思っていたけど，■分担することで良い影響があることが分かり，■更に，家事がやりやすくなった。
No.41	女	価値→価値	するべきことだと前から思っていたけど，■家事労働の分担について具体的にわかったから，その考えが強くなった。
No.115	女	価値→価値	「分担しなくてはならない」という気持ちは変わっていない。■でも，改めてなぜ分担が必要かが分かったと思う。
No.18	男	価値→社会	家事は分担するものでそれをやったから報酬をもらうことはできないという考えは変わってないが，■分担をしていたかというとしてなかったのでこれからは行動にうつしていく。

注）■は，カード化した内容の区切りを示す。

識がもっとも多く発現し，家族との関わりにおけるケアの価値に言及したものがみられ，自分と家族の関わりを位置づけてケアの側面に気づかせる本時のねらい①はほぼ達成されたと考えられた。

第三に，本時のねらい②に関して，社会的認識の記述数は，全体の約１割にとどまり，家事労働の社会化の問題をふまえた家事分担について認識が共有されたとは言い難い。これは，実際の授業時に資料３を検討する時間が十分確保できなかったことが一要因としてあげられる。

第四に，しかしながら，家事労働に関する認識の変容は，感覚的なものから，功利的，価値的，そして社会的認識へと深化していく構造にあることが読みとれた。家庭科の他領域の学習で，例えば，食の外部化などが取りあげられる機会は多く，他の単元をとおして認識が強化されていく可能性のあることが示唆された。

第五に，授業のねらい③について，本稿でのワー

クシート項目の分析のみで結論づけることは難しいが，意見交換と資料の読みとりをとおして表出した自分の生活を振り返る記述や，家事労働に関わる家族に目を向ける記述より，自分と家族の関わりから生活のあり方をとらえる認識の萌芽がみられた。

以上より，本時の実践において，家事労働を媒介とした人間関係に目を向ける機会が提供されたことにより，ケアに対する認識が深められたと考える。もとより，価値観は短時間で形成されるものではない。長期的な展望のもと，見いだされた認識構造をもとに，授業毎の刺激を効果的に与える指導の工夫と授業展開の開発に着手したいと考える。

注

1）たとえば，「家族・家庭生活」の学習を年間指導計画の中心に位置づけ，生徒の価値観の変容をとらえた研究（福田公子・平田道憲他：家族・家庭生活の価値観の形成に関する授業の効果，広島大学教育学部関係附属学校園共同研究体制紀要，26，149-156（1998））や保育体験実習における子どもや育児に関する認識の変容を追った研究（中嶋朋子・砂上史子他：高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第一報），家庭科教育学会誌，64(4)，351-361（2004））など，家事労働に関連する認識の変容をとらえた研究は行われているが，家事分担など家事労働そのものに焦点をあてたものはみあたらない。

2）NHK ビデオ教材「地球家族」，開隆堂，2003を使用した。

引用・参考文献

1）文部省：高等学校学習指導要領解説家庭編，実教出版（1990）
2）文部省：高等学校学習指導要領解説家庭編，開隆堂出版（2000）
3）堀内かおる：<家庭科における総合的学習>をつくる視点としてのジェンダー－家庭科の教科アイデンティティに関連して，横浜国立大学教育人間科学部紀要．Ⅰ教育科学，2，31-47（1999）
4）大本久美子：生活時間調査から家事労働・家族の団らん・余暇について考える，家庭科教育，7(9)，105-110（1997）
5）坂本理恵子：家事労働について考える，『家庭科への参加型アクション志向学習の導入』（中間美砂子編著），大修館書店，34-39（2006）
6）牧野カツコ編：『人間と家族を学ぶ家庭科ワークブック』，国土社，67-71（1996）
7）鈴木明子・平田道憲・高橋美与子・貴志倫子：家庭生活事象に対する学習者の認識をふまえた授業開発－家事労働に関する認識の変容を促す授業の提案－，学校教育実践学研究，12，243-253（2006）
8）日本家庭科教育学会編：家庭科教育事典，朝倉書店，170（1992）
9）ヒメルワイト，スーザン：“無償労働”の発見－“労働”概念の拡張の社会的諸結果，久場嬉子訳，日米女性ジャーナル，20，116-136（1996）
10）Fraser, Nancy: *After the family wage; Gender equality and the welfare state*, Political Theory, 22(4), 591-618(1994)
11）ファインマン，マーサ：家族積みすぎた箱舟，上野千鶴子監訳，学陽書房（2003）
12）宮本太郎：福祉政策による労働支援とジェンダー平等，月刊社会運動，296，2-13（2004）
13）貴志倫子：家庭科におけるケアリング教育の概念化－高等学校家庭科の教科書分析を手がかりに－，『生活実践力を育む家庭科教育の展開』（福田公子，山下智恵子，林未和子編著），大学教育出版，141-158（2004）
14）池野範男・渡部竜也・竹中伸夫：認識変容に関する社会科評価研究（1），学校教育実践学研究，10，61-70（2004）

Transformation of High School Students' Understanding about Household Work: Through Home Economics Lessons Focused on Relationships with One's Family

by

Noriko KISHI
Fukuoka University of Education
Akiko SUZUKI
Graduate School of Education, Hiroshima University
Miyoko TAKAHASHI
Attached Fukuyama Jr. and Sr. High School, Hiroshima University

The objectives of this study were to clarify learners' understanding about household work and to see how the objectives of Home Economics lessons are achieved. Lessons about household work which were focused on relationships with one's family were given in a high school. 119 student descriptions on lesson worksheets were analyzed. From these data, the learners' understanding was categorized into four domains: feeling, utility, valuing, and social domains. These domains had a hierarchical structure. Sharing and discussing issues with the teacher or classmates led the learners to think of various viewpoints toward housework. The learners could deepen their understanding about household work through the lessons which gave them chances to think about caring relationships.